炎症時における細胞動態と酵素活性を in vivo で可視化する 機能性 MRI プローブ

大阪大学大学院工学研究科

菊地 和也

Highly sensitive imaging of enzymatic activities in deep region of living organisms have been a difficult challenge for bioimaging materials. Among them, ¹⁹F magnetic resonance imaging (MRI) probes are suitable for noninvasively visualizing enzymatic activities in vivo due to zero background signal. Although various enzyme-responsive ¹⁹F MRI probes have been developed, most of them have not been applicable to in vivo imaging because of their low sensitivity. Recently, we developed perfluorocarbons-encapsulated nanoparticles and demonstrated that they showed outstanding sensitivity in vivo. Here, we developed enzyme-responsive ¹⁹F MRI nanoprobes (FLAME-DEVD 2) for detecting caspase-3/7 activity by employing the paramagnetic relaxation enhancement effect as the OFF/ON switch of ¹⁹F MRI signals. After intravenous injection of FLAME-DEVD 2 and apoptosis-inducing reagents, caspase-3/7 activity in a living mouse spleen was successfully imaged by ¹⁹F MRI. The results demonstrated that this imaging platform has great potential for highly sensitive detection of enzymatic activities in vivo.

1. 緒 言

生命活動は、生体分子が複雑に相互作用することでその 恒常性が保たれている。その中でも酵素は生命機能の維持 と同時に癌やアルツハイマー病などの様々な疾患を引き起 こすメディエーターとしての働きを持っている。生きた動 物個体で酵素活性をイメージングすることは、その機能や 動態の解析から、疾病の検出や薬効評価などの応用研究に 繋がる。Magnetic Resonance Imaging (MRI) は核磁気共 鳴現象を利用した三次元断層画像法であり、核磁化の励起 にラジオ波を用いているので、放射線被爆の危険性がない。 また空間分解能や組織コントラストが優れているため、生 体内における酵素活性を検出するのに非常に優れている手 法と言える。特に¹⁹F MRIは内在性バックグラウンドシグ ナルがほとんど存在しないため、生体に投与した¹⁹F MRI 造影剤のみを選択的にイメージングすることが可能であ る。これまでにいくつかの小分子化合物をベースとした酵 素活性検出¹⁹F MRIプローブが報告されており、本研究室 も常磁性緩和促進(PRE)効果に基づいた酵素活性検出19F MRIプローブを開発してきた。PRE効果とは、常磁性種 が持つ不対電子スピンの影響で、その近傍に存在する観 測核の横緩和時間T2が著しく減少する現象のことである。 T₂は、MRIシグナル強度と相関があるパラメーターであ り、T₂を制御することでMRIシグナルのOFF/ONのスイ ッチング原理を確立可能である。しかしながら小分子化合



Functional in vivo Imaging of Cellular Dynamics and Enzyme Activity after Inflammation Using Chemical MRI Probes

Kazuya Kikuchi

Graduate School of Engineering, Osaka University



Fig. 1 (a) Structure and TEM image of FLAME., (b) In vivo MR image of FLAME in tumor bearing mouse.

物をベースとする¹⁹F MRIプローブは、in vivoにおいて 低感度という問題点があった。

これまでに、上記の問題点を解決するために高感度な ¹⁹F MRI 造影剤 FLAME (FLuorine Accumulated silica nanoparticle for ¹⁹F MRI Enhancement)の開発に成功 している。FLAME は一分子内にフッ素を20個有する perfluoro 15-crown-5 ether (PFCE)を脂質により内包し、 その周りをシリカで被覆した構造をしている(Fig. 1a)。そ のため、生体内においても安定かつ非常に高感度な¹⁹F MRI シグナルを示すことがわかっている(Fig. 1b)。

本研究では、PRE効果によるOFF/ONスイッチング機構に基づき、生体内における酵素活性を検出する高感度な ¹⁹F MRI造影剤の開発を目的として取り組んだ。

2. 方 法

2.1. カスパーゼ-1 活性検出用¹⁹F MRI造影剤

デザインしたFLAME-WEHD Xは、FLAME、Gd³⁺ 錯体、 カスパーゼ-1 基質から構成される(Fig. 2)。カスパーゼ-1 は基質配列 WEHD における DのC 末端を切断することが 知られているので、この基質を介して FLAME と¹⁹F MRI シグナルを抑制する Gd³⁺ 錯体を連結させた。FLAME の ¹⁹F MRI シグナルは、Gd³⁺ が持つ PRE 効果により FLAME 内部のフッ素化合物の T₂ が短縮されており、一時的に消 失している。カスパーゼ-1 が基質を切断して、Gd³⁺ 錯体 がFLAME表面から解離することで、PRE効果が解消さ れ、¹⁹F MRIシグナルが回復する。またFLAMEとGd³⁺ 錯 体が立体障害となってカスパーゼ-1 が基質部位にアクセ スしにくいことが考えられる。そこで基質配列を2,3 個と 繰り返すことで、FLAMEとGd³⁺ 錯体間の距離が離れて カスパーゼ-1 がアクセスし易くなるとともに、酵素が基 質を断する確率が増えると期待した。

3. 結果

3.1. FLAME-WEHD X (X=1-3)の酵素反応

作製したFLAME-WEHD Xとカスパーゼ-1の酵素反応 を行い、¹⁹F MRI測定を行った。FLAME-WEHD 1,2で はカスパーゼ-1存在下、非存在下において¹⁹F MRIシグ ナルの増大がほとんど見られなかったのに対し、FLAME-WEHD 3では酵素反応開始後6時間から¹⁹F MRIシグナ ルの増大が確認された(Fig. 3)。

3. 2. FLAME-WEHD 3のマウス体内における¹⁹F MRIシグナル評価

FLAME-WEHD 3 がカスパーゼ-1 存在下において¹⁹F

MRIシグナル増大を示したので、これをマウス実験に用 いた。マウスはBlack 6を使用した。FLAME-WEHD 3 のみを生理食塩水中に分散させ、Black 6マウスに皮下注 射した。コントロールとして同じPFCE濃度のFLAME-COOHを反対側に皮下注射した。コントロール側では非常 に強い¹⁹F MRIシグナルが観測された。FLAME-WEHD 3を打ち込んだ側においては冠状断と水平断の両方で 3時 間後から¹⁹F MRIシグナルが観測され始めた。この原因と して皮膚への注射による

刺激に対する免疫応答、血清中の酵素による基質の切 断が考えられる。しかし、ポジティブコントロールの always ONのFLMAE-COOHと比べて¹⁹F MRIシグナル が非常に抑制されていることが確認された(Fig. 4)。

3. 3. FLAME-WEHD 3 を用いた生体における免疫 応答の可視化

最後に人為的に免疫応答を起こすために、FLAME-WEHD 3 (1.67 mM, 120 μL) を刺激物である IL-6 と同時 に皮下注射した。コントロール側では投与後 7 時間後か ら¹⁹F MRI シグナルが少ししか観測されなかったのに対し、 IL-6 を加えた側では投与後 30 分で非常に強い¹⁹F MRI シ



Fig. 2 Design principle of FLAME-WEHD X (X = 1-3).



Fig. 3 (a) ¹⁹F MRI phantom images of FLAME-WEHD X with or without caspase-1. (b) Time course of ¹⁹F MRI signal intensity.

グナルが観測された。これはIL-6によって引き起こされ た免疫応答に対してFLAME-WEHD3が応答し、¹⁹F MRI シグナルが増大したことを示唆する結果である(Fig. 5)。

4. 考察

PRE効果を利用したOFF/ONスイッチング機構に基 づいた分子設計をFLAMEに施し、in vivo応用可能な 酵素活性検出¹⁹F MRI造影剤の開発を行った。作製した FLAME-WEHD 3 はマウス体内の免疫応答を¹⁹F MRI に より検出した初めての例であり、今後この造影剤を用いて 痛風関節炎などの様々な炎症性疾患の検出、評価を行うこ とで、¹⁹F MRIを用いた新たな検出法として免疫学への貢 献が期待される。

5. 総 括

本研究で、カスパーゼ-1活性検出用¹⁹F MRI造影剤と カスパーゼ-3活性検出用¹⁹F MRI造影剤の開発をそれぞ れ行った。カスパーゼ-1活性検出用¹⁹F MRI造影剤であ



Fig. 4 In vivo ¹H/¹⁹F MRI measurement of FLAME-COOH and FLAME-WEHD 3 in black 6 mouse at 15 min, 3 h, 6 h, 9 h after subcutaneously injection.



Fig. 5 In vivo ¹H/¹⁹F MRI measurement of FLAME-WEHD 3 in black 6 mouse at 30 min, 7 h, 2 days after subcutaneously injection with or without IL-6 (1µg). Total administered volume is 120 μ L (C_{PFCE} =1.67 mM). ¹⁹F MRI RAREVTR method: coronal plane; the matrix size was 128 × 64 and the slice thickness was 40 mm. $T_{E,eff}$ was 16 ms. T_{R} was 1500 ms. The NEX was 128.

るFLAME-WEHD 3 は、カスパーゼ-1 の添加に伴いファ ントム像で¹⁹F MRIシグナルの増大が確認された。さらに マウスへの応用において、IL-6と皮下注射することによ りコントロールと比べて、非常に高感度にマウス体内の免 疫応答を¹⁹F MRI検出していることを示唆する結果が得ら れた。これはマウス体内の免疫応答を¹⁹F MRIにより検出 した世界で初めての例である。今後、細胞実験などを行う ことにFLAME-WEHD 3 がどの程度カスパーゼ-1 に対し て選択性を持っているか、そしてFLAME-WEHD 3 のマ ウス体内の動態を詳しく調べていくことで、特定の炎症性 疾患の¹⁹F MRI検出も期待される。

カスパーゼ-3活性検出用¹⁹F MRI造影剤である FLAME-DEVD 1,2は両者とも、ファントム像において 非常に高コントラストにカスパーゼ-3活性を検出できる ことが確認された。特に高コントラストにカスパーゼ-3 活性を検出できたFLAME-DEVD 2に関しては、マウス 体内のアポトーシスの¹⁹F MRI検出を行うことにより、本 研究で行ったプローブデザインが様々なプロテアーゼに応 用可能であると考えられる。

(引用文献)

- Nakamura T, Matsushita H, Sugihara F, Yoshioka Y, Mizukami S, Kikuchi K.: Activatable ¹⁹F MRI Nanoparticle Probes for the Detection of Reducing Environments, Angew. Chem. Int. Ed., 54, 1007-1010, 2015.
- Matsushita H, Mizukami S, Sugihara F, Nakanishi Y, Yoshioka Y, Kikuchi K,: Multifunctional Core-shell Silica Nanoparticles for Highly Sensitive ¹⁹F MRI, Angew. Chem. Int. Ed., 53, 1008-1011, 2014.

- Okada S, Mizukami S, Sakata T, Matsumura Y, Yoshioka Y, Kikuchi K,: Ratiometric MRI Sensors Based on Core-Shell Nanoparticles for Quantitative pH Imaging, Adv. Mater., 19, 2989-2992, 2014.
- Okada S, Mizukami S, Sakata T, Matsumura Y, Yoshioka Y, Kikuchi K,: Ratiometric MRI Contrast Agents Based on Core-Shell Nanoparticles for Quantitative pH Imaging, Dalton Trans., 42, 15864 -15867, 2013.
- 5) Matsushita H, Mizukami S, Mori Y, Sugihara F, Shirakawa M, Yoshioka Y, Kikuchi K,: ¹⁹F MRI Monitoring of Gene Expression in Living Cells via Cell Surface beta-Lactamase Activity, ChemBioChem, 13, 1579-1583, 2012.
- Mizukami S, Matsushita H, Takikawa R, Sugihara F, Shirakawa M, Kikuchi K,: ¹⁹F MRI Detection of β -Galactosidase Activity for Imaging of Gene Expression, Chem. Sci., 2, 1151-1155, 2011.
- Okada S, Mizukami S, Kikuchi K,: Application of Stimuli-Responsive Polymer for Development of Novel MRI Probes, ChemBioChem, 11, 785-787, 2010.
- 8) Mizukami S, Takikawa R, Sugihara F, Shirakawa M, Kikuchi K,: Dual Functional Probe to Detect Protease Activity for Fluorescence Measurement and ¹⁹F MRI, Angew. Chem. Int. Ed., 48, 3641-3643, 2009.
- 9) Mizukami S, Takikawa R, Sugihara F, Hori Y, Tochio H, Wälchli M, Shirakawa M, Kikuchi K, Paramagnetic Relaxation-based ¹⁹F MRI Probe to Detect Protease Activity, J. Am. Chem. Soc., 130, 794-795, 2008.